

3月27日 12:48

---

ホクミンから第3便が、支援物資を積んで明日3月28日（月）午前10時に出発いたします。

4月1日（金）までの予定で被災地へ向かいます。  
釜石方面で炊き出しや片付け作業を行います。

札幌福音自由教会の鍛冶勉先生、  
札幌栄光教会の笠見旅人先生、  
登別中央福音教会の高橋敏夫先生、  
北海道聖書学院院長の八尋勝先生、  
函館シオン教会の増井義明先生  
を含む計20名（札幌から3台15名、函館から1台4名、青森から1名）で向かいます。

3月28日10:01

---

ホクミンから第三便が出発いたしました。  
20名が出発いたしました。  
お祈りどうぞよろしくお願いいたします。

3月28日23:31

---

ホクミンから第3便が、久慈・宮古・釜石方面へ出発！

3月28日(月)、各教会の厚い祈りに支えられ、  
ホクミン第3便が札幌・函館の各地から支援物資を満載して出発しました。

北海道聖書学院からの6人は、途中立ち寄った七飯福音キリスト教会で、被災地から戻ってきたばかりのOMFのみなさんと出会いました。  
そこでともに祈りをあわせ、協力のバトンを、確かに受け継ぎました。



函館では各地からのメンバーが集合、フェリーの客室内で、さっそく最初のミーティングを行い、今回のスケジュールを確認し、心をひとつにあわせます。



21時過ぎには、青森に無事到着。明日は午前9時に青森を出発して現地入りします。

今回は、以下のスケジュールで、岩手県沿岸部の被災地を回る予定です。

3月29日(火)～30日(水)：久慈市旧山形村を拠点とし、三陸北部の被災地（久慈・野田・田野畑・田老・宮古）に向かいます。

3月31日(木)：釜石方面の被災地を訪問後、遠野経由で盛岡まで戻ります。

札幌・函館の各地に戻るのは、4月1日(金)を予定しています。

今回は、総勢 20 人のチームで現地入りします。

泥・がれきなどの排除・撤去、炊き出し、支援物資の分配を行うほか、

「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣く（ローマ 12:15）」という思いをもって、被災地の方々とお会いしたいと願っています。

今回もできる限り、随時情報をお届けしたいと願っています。

引き続き、皆様のお祈りをよろしくお願いいたします。

3月29日15:40

---

ホクミン第三団チームから中途報告です。

昨晩は青森ジョイフルチャペルに泊まり、  
教会の皆さんに大変よくしていただきました。

今日は久慈教会に来ました。

この教会は、アレン宣教師を記念して建てられた教会で、  
教会堂を建てる時に町も出資して建てられた素敵な会堂です。

久慈教会から野田に移動し、家と家の間の土砂の排除作業を行いました。  
これから、別の所へ移動します。

皆様のお祈り本当に感謝いたします。

3月29日23:50

---

ホクミンからの第3便、野田村に入る

朝8時、青森市を出発し、いよいよ現地に向かいます。

青森ジョイフルチャペル・青森バプテスト教会の皆さんの温かいおもてなしとお祈りに、心から感謝します。

12時半、今回の拠点となる久慈市・アレン記念教会に到着。

ここで、第2便として先に現地入りしている、ネイサン・スノー宣教師と合流。

その10分後には、さっそく隣の野田村に向かいます。

目的地への道中、それほど変わりなく見える風景の中に、突然現れたがれきの山。



そして13時過ぎ、野田村の中心部に入ると、そこには津波の直撃を受けて大破した家々や車、そして復興に向けて動き出している住民の方々の姿がありました。

「私たちは、この地に仕えます」

高橋敏夫師（同盟・登別中央福音教会）の祈りに「アーメン」と応え、野田村での働きを始めます。

ひとりひとり、スコップを手に、押し寄せた津波が残していった汚泥の片付けにとりかかります。



私たちのほとんどは、今回のような被災地支援に慣れてはおりません。

専門的な知識を持っているわけでもなく、大量のがれきを重機のように一気に撤去できるわけでもありません。できることは、不器用であってもまず、目の前の汚泥やがれきを、手作業でひとつひとつ片付けていくこと。不慣れではあっても、少しずつ工夫してやってみる。



ひとりではできなくても、主にあって協力して、できたことができました。

初日の作業は、夕方 16:00 頃まで続きました。

作業終了後、今回のチームのリーダーである鍛冶勉師（札幌福音自由教会）ら一部メンバーは、日没まで、明日以降の支援を行うべき被災地がどこであるか見定めるために、さらに南の、海岸沿いの集落を、ひとつひとつ回りました。

メンバーの目に映ったものは、今は静かな海と、あまりにも大きな津波の爪跡。小さな集落がほとんど丸ごと壊滅した姿を目の当たりにして、言葉を失いました。

その村の役場を訪問し、私たちにできることはないか尋ねたところ

「重機でのがれきの撤去作業にやっとりかかった直後なので、まだ手作業での支援をお願いできる状況ではないのです...」

との返答をいただきました。

明日（3月30日）も、引き続き野田村での働きを続けます。

今日と同じ、がれきや汚泥の撤去作業のほか、200人分の炊き出しを行う予定です。

また一部のメンバーは、私たちにもさせていただけの支援の場がないか、祈りつつさらに南下します。

私たちの手でできることは、小さなことに過ぎないかもしれないけれど、

主がさせてくださることを、精一杯させていただきたい、震災から2週間余り経過したこの地に仕えたい、そう願っています。

皆様の祈りに支えられ、導かれ、働きが進められています。

引き続き、皆様のお祈りをよろしくお願いいたします。



3月30日9:40

---

野田村での働き、2日目を迎えました

ホクミン第3弾チームは、宿泊先の久慈市・アレン記念教会で、ともに祈りをあわせた後、朝9時過ぎに野田村に入りました。

現地の村役場と調整のうえ、昨日同様、汚泥・がれきの撤去作業を行います。

現地には、私たちホクミンのチーム以外にも、各所からのボランティアが来ています。

私たちが到着した直後にも、沖縄駐留のアメリカ海軍+三沢基地駐留のアメリカ空軍、総勢40名ほどが現地入りしています。



米軍チームと同行している、フィネックス大・ダンカン・ブレント教授（心理学）は、日頃から休暇日を活用して、このようなボランティア活動を行っています。今回の大震災に際しても、被災した各地域を訪問しています。

多くの方々との協力のもと、作業が進められていきます。

今日はこれから、昼12時に、野田村役場での炊き出し（200人分を予定）を行います。

鍛冶師・スノー師ら一行は、宮古方面に向かう予定です。

すべての働きが、主の導きと祝福のうちに進められるよう、お祈りください。

3月30日14:52

---

野田村での炊き出し、人々の必要へと届け

野田村での作業を続けるホクミン第3弾チームは、野田村役場入口を会場として炊き出しを行い、カレーライスとりんごジュースを提供しました。

当初 100 食分を予定していたところ、多くの食材が集められた結果、今日は約 250 食分の提供が可能となりました。このため炊き出しの担当メンバーは、前日も夜遅くまで準備にあたりました。

準備段階では、炊き出しを必要としている避難所の人々は実際どれくらいいるのだろうか、多く用意しても余ってしまうのではないかと懸念する声もありました。しかし、昼 12 時に始まった炊き出しには人々の列が絶えず、準備したカレーライスは、ほぼ 30 分でなくなりました。現地で活動している各地からのボランティアの方々へも提供を行いました。9 割方は地元の方々で、「暖かいご飯がうれしい」という声が聞かれました。



(写真：並ぶ人々)

会場には「本日お昼、カレー炊き出し行います！北海道から来ました」と貼り紙が出され、地域の方々にも暖かく迎え入れられたことを感じました。

弱って動けずにいる他の方のところへも運んでくださった方が、複数名いました。



(写真：入り口の貼り紙+地元の方々)

今回、予想よりはるかに多くの方々に対して炊き出しを行うことができたのは、被災地で物資提供等の拠点となっている村役場を会場としたことの効果が大きかったと思われます。

同時に、支援を必要としている方々が、私たちの予想よりはるかに多くいるということにも気付かされました。避難所にいる方々だけが、支援を待っているのではありません。家が残っている人々も、電気・ガスなどのライフラインが寸断され、支援物資が行き届くようになったとはいえ、暖かいものを口にする生活はまだ取り戻せていないのだと、来てくださった方々からうかがいました。

今回の炊き出しは、私たちにとって「受けるよりも与えるほうが幸いである」という、主イエスの御言葉の意味を実感させていただける恵みの機会でした。そして同時に、「受ける人々」がまだ大勢待っていることを痛感しています。

私たちは明日、釜石市に移動して、もう一回炊き出しを行う予定です。そこでも、ひとりでも多くの方々の必要に届くことができれば...と、心から願います。

どうか引き続き、皆さまのお祈りを、ともにあわせてください。



3月30日 23:11

被災地の状況について知る～野田村の人々との触れ合いから～

ホクミン第3弾チームの男性メンバー約10人は、今日（3月30日）野田村での汚泥・がれきの撤去作業を引き続き行いました。

多くの人手を集中して投入することで、家2軒分の敷地内にいっぱい積もった汚泥・がれきを、一気に片付けることができました。



(写真：重い汚泥を取り除く男性メンバーたち)

作業の合い間に、現地の方々から、いろいろとお話を聞くことができました。それを通して、今、野田村の方々がかかっている状況について知ることができました。

国道45号からのかなりの地域で、建物がほぼなぎ倒されています。海岸線沿いの松並木を超えて、津波が押し寄せてきたと聞きました。商店街そばを流れる川からも、津波の水が押し寄せてきたそうです。この商店街でも、通りを挟んで、片側は建物がまったくない状態になっています。がれきが急ピッチで排出されています。生き残った人々が、自分たちの家や街の復旧に向けて、前向きに取り組んでいる様子が見えました。

私たちが現地入りした日の前日にあたる、今週の月曜日まで、各地からの消防団の方々が入り、救出作業（そして、遺体の確認作業）を続けていたそうです。

その時期ではまだ、私たちが現地入りしても、お手伝いできることはおそらくなかったのだろうと考えさせられました。

今回の働きのうちに、主が時を確かに備えてくださったことを思います。

水道と電気は、場所によって使えるところもあるそうです（この日も、電気工事の方々が来ていました）。ガソリン・灯油の状況は改善されつつあります。またプロパンガスを使えるようになったところもあると聞きました。

現時点でまったく復旧していないのは、固定電話と下水道だそうです。

後者の影響は深刻で、「水があっても流すことができないから、洗濯ができない。汚水を流すことができないから、近くの川で洗濯をしている」というご婦人がいました。

商店街の方々にとっては、入っていた保険の対応で、明暗が分かれていると聞きました（JA と商工会、それぞれの保険で、条件が異なっているそうです）。

漁業などの地場産業も被害を受けているため、その影響が今後出てくることが考えられます（例：魚屋さんに地元の港から魚が入ってこない）。

私たちの想像を絶する被害に遭いながら、自分たちの家に戻って片付けを行う人々の姿から、前向きに生きようとする明るさが感じられたのが、非常に印象的でした。

この地を襲った大きな地震が、主の御手の中にあっただとすれば、生き残った人々のうちに、前向きに生きる力を与えるのも、

また主の御手によることなのだ...と思わせられます。

作業を終了し、ボランティア本部のある村役場に向かう途中、

ホクミンの男性メンバーたちは、津波で傷んだ理容室の電動椅子を運び出そうとしている場面に出くわしました。

大勢の人数で搬出を手伝うことで、大きな電動椅子3脚が、スムーズに軽トラックに運び込まれました。

これも、「この地に仕える」ことの、ひとつの形でした。



(写真：理容室の椅子を運び出す)

「これからが大変だ。でも、みんな気丈だよ。避難所でもみんな励まし合っていたよ。まだまだ何ヶ月かかるかわからないけど、前のままに戻りはしないけど、普通の生活になればね」と、津波のときに店の2階に取り残されたという商店主の方が、明るい表情で話してくださいました。

私たちが今回仕えることが許されたこの街は、今、復旧に向けて前向きに立ち上がろうとしています。そして、この中心街が復旧することが、この地にあるコミュニティ全体が立ち上がるために必要なことだと、肌で感じました。

今回私たちが出会うことができた、被災した人々すべてうえに、主の癒し・慰め・励ましが豊かに与えられるよう、祈ります。

3月30日 23:14

---

#### 田野畑村～宮古市の被災状況

ホクミン第3弾チームのうち、鍛冶勉師（札幌福音自由教会）ら9名は、今日（3月30日）、今後の支援活動の検討も視野に入れ、宮古方面に向かいました。

現地から戻った直後の鍛冶師から、被災状況について聞きました。

—先生方は今日、どのあたりまで回ることができましたか？

鍛冶師：今日は、昨日（3月29日）の夕方に訪れた田野畑村からスタートして、宮古市の田老地区・中心部、そしてもう少し南にある磯鶏地区まで足を伸ばしました。

—それぞれの地域の状況について、伺いたいと思います。まず、田野畑村はどのような状況でしたか？

鍛冶師：田野畑村では、札幌から運んだ物資をお渡しすることができました。また、津波に家を流された人たちが体育館に避難しているところも見ることができました。今回は、物資としての支援を行いました。田野畑村では、人手としての支援は、まだ受け入れ態勢ができていないので、来週あるいは再来週に再度支援できればと考えています。

—次に、田老地区はどうでしたか？

鍛冶師：田老地区には、自衛隊が入っていて、私たちの手伝える余地は、今のところまったくない状況でした。ここには、45年かかって築いた、有名な堤防（津波太郎）があるのですが、それでも村全体が潰れている、

本当にひどい被害状況でした。

私たちが手伝えることができたなら...と思いますが、今の時点では何もできない状況です。私たちボランティアが入れる時期がきたら、支援の手を送りたいと考えます。



(写真：田老地区・「津波太郎」のすぐ近くも、一面がれきの山と化している)

一宮古市の中心部はどうでしたか？

鍛冶師：宮古コミュニティ・チャーチに行きました。

牧師はちょうど商店街にボランティアに行かれたところで、すれ違いだったのですが、牧師夫人からお話を聞くことができました。

「商店街の店主たちは、今回の震災被害で、みんな店を閉じようと考えていた。

しかし、ボランティアの姿を見て励ましを受け、もう一度立ち上がろうとしている」のだそうです。



(写真：被災地の中に立つ、宮古コミュニティ・チャーチ)



—磯鶏地区はどうでしたか？地震直後に孤立した地域だと聞きましたが？

鍛冶師：磯鶏では、現地の対策本部の方に会い、「お手伝いをさせていただきたい」と申し出ました。そして、道の斜面にあるがれきを、重機の扱える場所まで人力で落とす作業を、計9人で行いました。人数が多かったので、いっぺんに作業を行うことができ、現地の方々に喜んでいただくことができ、感謝でした。

避難所になった小学校の2階にまで水が来て、小学生も4~5人が亡くなったと、地元の方から聞きました。またこの地区には、海上自衛隊が炊き出しに来てくれたことはあるのですが、まだまだボランティアの必要がある状況です。

—最後に、それぞれの場所を実際にご覧になって、どのように感じられたか、お聞かせください。

鍛冶師：思った以上に、自然災害の恐ろしさを感じました。人間が自分たちが完璧だと思った備え以上のことが起こった、ということを思うとき、私たちは自然の中で無力だと思うと同時に、共に立ち上がるための協力体制作りの必要を感じます。これからまだまだ、ボランティアの活動の必要があると思います。

3月31日 23:59

---

大槌町炊き出しリポート～支援の難しさと、導きの確かさ～

被災地での最終日にあたる3月31日（木）、ホクミン第3弾チームは、釜石市での炊き出しを予定していました。

前日より用意した200人分の豚汁とおにぎりを積み込み、朝7時に久慈市を出発。道中、津波によって壊滅的な被害を受けた町々の姿を、自分の目で目撃することとなりました。

山間の道を抜けると、集落があったはずの場所が、一面がれきの原となっており、その中で自衛隊が救援活動を展開している光景は、本当に衝撃的なものでした。

10時半、先行して釜石入りし、地元との調整に当たっていたスノー師と合流しました。しかし、調整が不調に終わり、この日釜石での炊き出しはできないという結論に至りました。そのため、関係各方面と調整のうえ、私たちは急遽、隣の大槌町へと向かいました。

緊急車両扱いで、大槌町の中心部に入る道を走りました。そこに広がっていたのは、一面の焼け野原でした。地震と津波だけにとどまらず、火災にまでうちのめされた町の姿は、今回訪れた被災地の中でも、最も衝撃的なものでした。



(写真：被災した大槌町の姿に、言葉を失う)

しかしここでも、炊き出しの許可は降りませんでした。

指示された公民館に向かったものの、そこには多くの車が詰めかけており、車で建物に近寄ることさえ不可能。地元の車や自衛隊の救援車両にまで迷惑をかける可能性さえ考えなければならない状況でした。

なんとか被災地の方々に対して炊き出しを行いたい、

しかし、現地の調整を無視して支援活動を行うことは、混乱をもたらし、被災地の方々には迷惑をかける結果となってしまいます。

ここ大槌町の置かれている状況は、明らかに昨日までの野田村のものとは異なっていました。

そして、必要な支援の段階や内容も、やはり異なっています。

私たちは、「炊き出しはできない」という条件のもと、2つの避難所を指示されました。

用意した食材が無駄になってしまうことを申し訳なく思いながら、それでも、今私たちにさせていただけることに取り組もうと、

気持ちを切り替え、二手に分かれて現地に向かいました。

ところが、指示された場所のひとつである、大ヶ口町の多目的集会所に着いて、担当の方と話したところ、夕食として炊き出しを行ってもよいとの返答をいただきました。

急遽、他の避難所に向かったグループと連絡をとり、準備にとりかかりました。

夕方になると、避難所に暮らす人たちだけではなく、近くの住民の方も、炊き出しの列に並びました。



(写真：炊き出しの列)

家族のためにと鍋を持って豚汁を受け取る人も多くいました。

中には、家族6人で暮らしているのに、おにぎりを「(子どもたちの分だけ)4個ください」と遠慮して言う男性もおり

(そばにいた高橋敏夫師が気付いて、家族全員分、6個のおにぎりを無事さしあげることができました)、被災地に暮らす人たちの、切ないまでの心遣いを感じました。

炊き出しの最中、避難所を震度4の余震が襲い、ドドドドという地鳴りのような音と大きな揺れを、避難所の方々とともに感じました。

今もこのような恐怖の中に、人々が暮らしていることを実感する一幕でした。

炊き出しに来た近隣の方と話をしたところ、ガソリンがまったくなくなってしまう、身内の葬儀に行くこともできないという方がおられました。

急ぎ、予備として積み込んでいた移動用のガソリンを提供し、大変喜ばれました。

現在、大槌町内のガソリンスタンドがすべて被災し、営業できない状態にあります。

大槌町の方々は、ガソリンを求めて、近隣の釜石市・遠野市などに行く必要があるとのことで、そこまで行っても品切れで店じまいしていた、という話も聞くことができました。

夕方の炊き出しが始まるまでの間、避難所に寄せられている衣類など物資の仕分け作業を行いました。

あるメンバーは、実際に送られている物を手にとり、その状態を見て、「自分たちが物資を送るときのことを考えさせられた」と言います。



(写真：物資の仕分けを行うメンバーたち)

今回寄せられた食材のうち、炊き出しに使用し切れなかったものは、すべて避難所の方々にお渡しすることができました。

本当にどうもありがとうございました。

今日の活動は、予想しない事柄の連続でした。

ボランティア活動の難しさと、主の導きの確かさを強く感じさせるものでした。

これほどまでに大きな災害に直面するのは、私たちすべてにとって初めての経験です。

私たちの予想通りに事が運ぶことはありませんでしたが、そこに主の備えがあり、炊き出しを行い、地域の方々に喜んでいただけたことは、本当に感謝でした。

実際に現地に行ってみないとわからないことが、いくつも見えてきました。

夜のミーティングでも、さまざまな意見が出されました。

今回の経験が、第4弾・第5弾以降の支援活動に活かされ、よりよい形で、この主の働きが進められることを、そして今回の大震災で傷を受けた、被災地の方々の必要に届くようにと、切に願います。

大槌町での活動終了後、全員無事に盛岡市(盛岡聖書バプテスト教会・盛岡みなみ教会)に到着いたしました。

明日、北海道に戻ります。

私たちの帰りの道のりの守りもそうですが、それ以上に、私たちが今回出会った、

この大震災で家族や家を失い、未だ不自由な生活を送っている方々に、主の慰めがありますように、

そしてこの働きがよりよい形で進められることができるよう、お祈りください。

今回の私たちの活動をすべて導き、その中に働いてくださった主の御名を、心からほめたたえます。



4月1日18:35

大槌町炊き出しレポート（続）～地域の実情を見極めての活動を～

3月31日（木）、ホクミン第3弾チームは、大槌町の2箇所の避難所に分かれて、ボランティア活動を行いました。既報の大ヶ口・多目的集会所にあわせ、桜木町・保健福祉会館での活動について報告します。

桜木町・保健福祉会館がある地域は、津波が人の肩ほどの高さにまでなったそうです。家の中にあるすべての物が海水に浸かり、使えなくなってしまいました。そのため、ここで必要とされていることは、家の中にある物を外に搬出する作業でした。12人のメンバーは3チームに分かれ、指示された家での作業にあたりました。地域にはご高齢の方が多く、この作業を住民だけで行うことは困難です。大人数でこのような作業を行うことで、地域の必要に応えることができました。



（写真タテ：家の玄関のこの高さまで、津波が押し寄せてきた）

実際に行ってみると、この地域にも炊き出しの必要があることがわかりました。そのため急遽、手持ちの食材でカレーの炊き出しを行い、多くの方々に喜ばれました。また、地域住民に対して、生活物資等の配布を行いました。大槌町ではほとんどの商店が被災し、地域での買い物ができない状況にあるため、これらの物資は非常に喜ば

れました。



(写真：地元の商店。中の物がすべて被災し、営業より復旧が先決な状態)

今回の大槌町の2箇所で行った支援から考えさせられることは、地域の実情を見極めたうえで、活動を行う必要がある、ということです。

先に向かった野田村の場合、町全体が壊滅的な被害を受けた地域と、家での生活がまだ可能な地域とが近接していました。

また村役場が中心的な機能を果たしていたため、情報の収集や活動が容易な状況でした。

これに対して大槌町の場合、壊滅的な被害が広範囲に広がり、町役場もその中に巻き込まれていました。

そのため、野田村のような形での中心的な機能を求めることは、現状では難しいのでしょうか。

地域の必要について具体的に把握することができたのは、避難所を直接訪れた後のことでした。

炊き出しが断られたケースでは、「避難所が人や物資で混雑しているため、炊き出しの受け入れ態勢が取れない」というのが、その理由であったようです。

しかし、レポートの通り、受け入れが可能な他の避難所も存在しており、また既報の大ヶ口・多目的集会所のように、同様の事情で炊き出しを野外で行ったために、避難所にいる人たちにとどまらず、周辺の方々の必要にも応えることができました。

当然のことながら、自治体ごとに、ボランティア受け入れの方針・方法が異なることも、忘れてはなりません。

被災地を愛し、仕えるために、私たちが備えるべきものは、主への信頼と祈りとあわせて、

「現地の状況はこうであるはずだ」という予見を置いて、被災地の姿を見つめることかもしれません。

そのような視点が与えられるよう、主に願います。

4月1日18:40

---

ホクミン第3弾チーム、それぞれが感じたこと

岩手県三陸地方（野田村・大槌町ほか）でのボランティア活動を終えたホクミン第3弾チームは、翌4月1日、北海道への帰途につきました。

今回、チームに加わったのは、福音自由・札幌福音自由教会より3名、兄弟団・札幌栄光教会より1名、札幌キリスト福音館より3名、同盟・登別中央福音教会より2名、フォースクエア・函館シオン教会から4名、北海道聖書学院から6名、そしてインマヌエル・青森キリスト教会からの1名をあわせ、全20名のメンバーでした。

また現地では、第2弾としてすでに活動を行っていた、ネイサン・スノー宣教師（福音バプテスト宣教団）ら5名とともに活動できました。

それぞれの目に映った被災地の姿は、このような形で行うことができた活動は、ひとりひとりにとってどのようなものだったのか、このことを通して何を思い、どのようなことを教えられたのか、何人かのメンバーに、今回感じたことについて聞きました。

#### A 兄

「釜石の繁華街を襲った津波の惨状にショックを受けた。

繁華街の店舗に、軒並み×印が記されていて、このところで多くの人々が亡くなったのだと気付かされた。

これからの復興には、時間のある、自分のような60歳を超えた男性でも女性でも、役に立つことがたくさんあるのだと感じた。

例えば、被災地には老人が多く住んでいるので、家の掃除などの必要もこれから続く。

宿泊施設さえ確保すれば、そこを拠点として、体力に合わせて、婦人方でも家の掃除や炊き出しなど、なすべきことがたくさんあるように思う。

いろいろな機会をとらえて、できるだけ多くの人々が、今回の被災地の惨状を見て、ボランティアに参加することは、とても有意義なことだと思う。」

#### B 姉

「海岸線の被害を見て、電信柱や線路や、人の力では動かせないものが軽くなぎ倒されていることに、改めて被害の大きさを感じた。

そういう中でも、野田村では水も電気も9割がた復旧していると聞いた。

自分は第三者の立場でしかないが、必ず復旧する、ということを感じた。

今回関わった最大のことは炊き出し。大量に作るのは初めてだし、その場でうまくいかないことはたくさんあった。

現地で火と水と電気が使えたのがよかった。それなしにはできなかった。

ひとつひとつの言葉が、とても印象に残った。被災者の方の心理状況はわからないけれど、私たちの何気ない

会話で傷つけてしまうのかもしれない。

神様を信じている者として、恵みにとどまっていなければ、傷つける言葉を発してしまうのかもしれない。

自分のためにも、相手のためにも、神様の愛に満たされたい。

被災者の方々が、喜んで受け入れてくれたことが、本当に嬉しかった。」

## C 兄

「地震が起きてから、何か自分がアクションを起こしたいと思っていた。

ホクミンの Web サイトなどネットで情報収集したり、何ができるだろうかと祈りながらずっと過ごしていた。

母教会の牧師に相談している過程で、自分にとって然るべきルートから連絡が来た。

神様のタイミングだと思った。自分が行くことに関して、送り出してくれている教会が祈ってくれたことが感謝だった。

被災地のあまりにすさまじい状況に圧倒されている。でも、力強く生きている人たちがそこにおいて、一生懸命汚れた家を片付けている人たちがいる。

その人たちのお手伝いが少しでもできて、よかった。

個人的には、リーダーシップについて考えさせられる機会ともなった。

実際にリーダーシップをとった先生方の姿から教えられた。

トラブルが発生して、自分で納得できなかったときに『リーダーに従いましょう』と声をかけられた。

そして、従って行った時に道が開かれた。みんなが祈って、準備してきたことに、神様は道を開いてくださった。自分の計画をはるかに超えた神の導きを感じた。」

## D 兄

「被災地側の事情もあり、予定の変更は当たり前で、わからないことだらけ。

せっかく北海道からボランティアに行ったのに...という気持ちが強くて、勝手に自分の中で不安を覚えていた。釜石での炊き出しができなくなったとき、準備した炊き出しが無駄になってしまうのではないかと、無駄に一日を過ごしてしまった、

でもそういう思いを持つのはいやだ...など、複雑な思いを持った。

そこに神様の完璧な導きがあって、働くことができた。不安だったとしても、神様が導いてくださるのだ、ということを経験できた。それが感謝だった。

今はまだ、立ち上げていく段階、手探りの段階なのだと思う。いろいろと課題が見えてきた。

今回は神様が導いてくださり、全日程で良い働きができたが、それをより確実にできるよう、みんなが必要以上に不安がらず、計画的に働けるように調整する専任者が必要だと思う。」

## E 師

「今まで海外の被災状況などのニュースを見て、かわいそうだな...と思ったり、教会で募金をしたりしていたけど、いざこういうことが起きて、今まで震災を他人事として見ていたことに気付かされた。

その中で自分で何か取り組みたいと思った時に、今回の話が来て、二つ返事で引き受けた。

現地で悲惨な状況を見ていく中で、自分たちにできることは、本当に小さなことだと気付かされた。

炊き出しを一食出したり、泥を出したり、がれきを出したり...日本を襲った大災害の中で、自分たちがしたこととは本当に小さなことだと受けとめている。



しかし確かなことは、現地の人たちが受けるはずの汚れを、私たちが汚れたこと。そのことで、自分の中で、神様に対するひとつの回答を出せたような、そんな気がしている。

どれだけ作業したか、どれだけ成果を出したかではなく、私たちが作業をすることで、被災者の苦しみ・悲しみの傍らにいたことを、はっきりと教えられた。

クリスチャンにできることは、汚れたりして傍らにいたり、アピールしなくても、忘れられても、神様は覚えておられることを信じて、黙々と働くことだったり、そのようなことではないだろうか。

また、今回のボランティアに、外国籍の方がいたことに感銘を受けた。

家族に心配され、行かなくてもいい立場の人が、進んでそこに行ったということは、すごいことだと思うし、感謝したい。」

それぞれに感じたことが、次に続く支援に活かされることを願います。

そして今回、多くのメンバーが集められ、協力してこのわざにあずかることができたことを、主に感謝します。



4月2日0:27

---

ホクミン第3弾チーム、無事に帰着

3月28日(月)に出発したホクミン第3弾チームは、岩手県三陸地方(野田村・大槌町ほか)でのボランティア活動を終えて、4月1日(金)夜に無事帰着しました。

ほとんどのメンバーにとって初めてのボランティア経験であり、予定通りに作業が進まないことも多々ありました。すべてのうちに主が力強く働き、導き、守ってくださいました。20人のメンバー全員、事故もなく、途中で体調を崩すこともなく、最終日まで支えられました。